

▶平成28年度第1回巡検 「秩父巡検」は11月26日(土)開催

◆平成28年度第1回巡検は秋の深まる「秩父界限」を歩きます。

開催日：平成28年11月26日(土) 現地集合です。

集合：西武鉄道「西武秩父駅」改札出口10:00集合

集合は西武鉄道の「西武秩父駅」前です。秩父鉄道「秩父駅」ではありません。以下は時刻表です。

- ①ちちぶ7号 池袋8:30→所沢8:51→西武秩父9:52
(指定席・特急)
- ②西武池袋線 快速急行 三峰口行き
池袋8:05→所沢8:31→西武秩父9:48 (この列車は横瀬で分離し、8:50発長瀬行きの車両があり

展覧会情報

広重 最初と最後の東海道(地図でたどる東海道と同時開催)

期間 10月18日～11月20日

会場 静岡市東海道広重美術館(静岡市清水区)

電話 054-375-4454

G空間EXPO

期間 11月24日～26日

会場 日本科学未来館(江東区)

ホームページ <http://www.g-expo.jp>

村絵図展 変わったトコロと変わらないトコロ

期間 9月16日～12月4日

会場 可児郷土歴史館(可児市)

mini地図NEWS

▶商人の世界地図公開

展覧会情報にも関係しますが、松阪商人が作った、非公開の世界地図「新訂万国全図」が、松阪市殿町の本居宣長旧宅で特別公開中。地図は、商人の竹川竹斎、国分信親の兄弟が江戸末期の1839(天保10)年、天文学者の高橋景保が作った地図を書き写したもの。竹斎が作った私立図書館「射和文庫」(射和町)に収蔵され、当時、地元住民に公開されていました。和紙32枚(横192cm、縦112cm)に、東西半球に分けて書かれています。会期は11月30日まで(中日新聞)

ます。次駅の御花畑と西武秩父は徒歩約5分です。

③各駅西武秩父行き 池袋8:08→西武秩父10:10

①か②をお勧めします。

講師：伊藤等 先生(日本地図学会)

◆平成28年度第2回巡検は、「水戸と西山荘」バス巡検を予定しています。

開催日：平成29年3月4日(土) 新宿工学院前8:00集合

恒例のバス巡検は、梅の花咲く偕楽園など「水戸界限」を歩きます。今回は地図情報2017年2月号特集「城と大名庭園(仮)」とリンクし、バスでなければ訪れにくい西山荘や、徳川ミュージアムでの解説など、水戸徳川家のご協力で開催の予定です。ご期待下さい。

ホームページとICICニュース2月号でもお知らせします。

電話 0574-64-0211

色の博物誌 江戸の色材を視る・読む

期間 10月22日～12月18日

会場 目黒区美術館(目黒区)

電話 03-3714-1201

古地図 日本国図から藩領絵図まで(仮称)

期間 11月19日～2017年1月29日

会場 富山市郷土博物館(富山市)

電話 076-432-7911

紙で旅するニッポン ～九州・中国編～

期間 9月17日～2017年3月5日

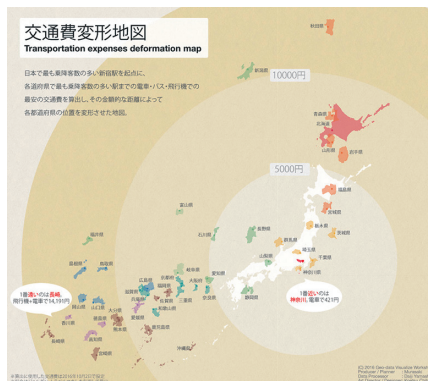
会場 紙の博物館(北区)

電話 03-3916-2320

▶「東京への交通費」で地図を描くと…

東京への交通費を、都道府県別に示した「交通費変形地図」が面白い。地図を制作したのは、地理などのデータを素材にモノづくりを行う「Geodata Visualize Workshop」。最も遠いのが長崎県の14,191円、近いのが神奈川県

の421円(@niftyニュース)。



地図 絡み

第66回 青森駅前市場

帝京大学理事 井口悦男

東北、奥羽両本線の出会う陸奥湾に面した、終着駅の青森駅。その駅前から直角に伸びる繁華街、新町のはじまりに、駅前市場がある。

その場外部分にあたる、りんご専用売場が、駅前側にもあって、りんご箱に入ったもみ殻の中に、赤や黄の、つやつやした食欲をそそる青森名品一並び輝やく場所が、われわれを招く。現在なら木箱の細長さにくらべ、四角型で、やや小さい段ボールに美しく印刷されたに対し、荒削り板に囲まれただけにすぎない。この木箱は、現在、商品以前のりんご移動用に、格下げされ使われる。

また、この荒削り板は、木造家屋の外壁などに、トタン板屋根とともに使われ、その塗料にコルタルが重ねられ、屋内外にぶら下げられた裸電球と合わせ、薄暗さが目立った。何度も、塗り重ねられた結果、表面の凹凸状況から、一層黒味がかって、特有の暗い雰囲気強調された。立並ぶ軒並みから、この黒っぽさを持つ家が、すぐにかざわけられたものであった。現在の、明るい蛍光灯下に、アルミサッシの滑る肌のなかに展示される商品のたたずまいとは、対照的景観と言える。

若い頃、早春、国鉄バスの酸ヶ湯開通前後から、八甲



空中写真“MT0731X”、昭和48年5月6日、国土地理院撮影
中央に青森駅。上に青函連絡船の姿が見える。(国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス)



昭和30年代の古川りんご市場(藤巻健二氏撮影、写真で見る昭和30~40年代の青森市民の暮らし)

田山にシールで入山し、楽しみをくり返えていた折、宿で、いかの細切り刺身のほか、長芋細切りに、真鱈の子がかがやく厚切りを毎回お目に掛かっていた。

それらの食品が並べられていたのが、木造低屋根コルタ塗りで薄暗い市場の棚であった。そこで私が見張ったのは、東京など関東では、見たこともなかった「真鱈の子」の大きな姿であった。しかも、黒白模様が入った、猫を思わせる、そして寒餅のなまこ近くの大きさの、一般的鱈子とは相違する、いかにも存在感をしめす、巨大タラコが、ごろごろ並ぶ店先は、興味津々にほかならなかった。味のほうは、タラコと変わりはなかった。同じ味の大型が存在したこと自体、オドロキであった。

関連して言えば、青森に近い城下町、弘前で、とくに目立った建物に、軒のぐっと低い、例えば急坂の上に建っている場合、軒先の棟が坂道に、引っ掛かる迄となり、窓が設けられない不思議な構えとなっていたりして、隣家と明らかに、平地で並んでいても、低さが強調される。だんだんに、このような姿のトタン屋根の姿は、少なくなってきているが、薄暗さは、このことに結びつきあるとも考えられる。雪対策から生まれたとも考えられる。

トタン屋根を、赤茶色の滑らかな塗料で塗り、コルタルの野暮さに対し、アカ抜けた感じにしたものも、都会地では見かける。これだけの変化で薄暗さから解放されたこと確かである。雪は同じように降りそそぐが、建物からの印象は、別のものように思える。盛岡から北に、東北らしさが遅くまで、残っていたが、黒っぽく、低い軒の街中に占める数からくる反映からとなろうか。それにしても、薄暗らいコルタ塗りの低屋根平屋と、かつての市場とが結びつくという共通点に時代性のあることは、まことに嬉ばしい限りである。(H.28.10.14)